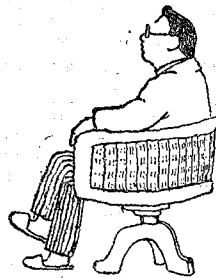


# 漫 録

## 平將門の首祭り

長 江 生



大藏大臣が平將門の首祭りをしたといふことが若し事實であるならば、誠に時代放れのしたエヤゾテツクな話題ではあるまいか。大藏大臣と首祭り、代數學の方程式にもない様な、恰も探偵小説の筋書に出て呉る奇怪な主役でなくてはならない、生蕃とかアイヌとかの年中行事にしてゐる首祭りのことなら、ざしらず、此の聖代に於てと鳥渡不審

の眉を寄せて見たくなる、何しろる語呂の合はない突飛な行事であるから――。

然し、熟考して見れば、現内閣は政友會内閣に劣らないほど役人の首をズバズバと切り棄てにしてゐるから、人の崇りの恐ろしさを考へて、せめての罪障消滅の意味合から、將門塚の供養を行ふことも滿更ではあるまい、人のため後

世は願つておくものである。

一體將門塚と大藏大臣とはどんな關係を有してゐるか、何のために將門塚が大藏省内にゴロゴロしてゐるのかといふことから説明したい、將門塚を見たいと思ふならば、内務省の高等官食堂を通り抜けて、大藏省の中央廊下を右に見て行けば、恰もキノコの様な形をした古墳がチヨコナンと安置してある、吾々から見れば實につまらない品物だ、高が知れた石塊に何か知らん誌してある、只だ普通の石塊より苦むして如何にも古色蒼然たる所があるだけだ、其塵つまらない二足三文の石塊が、吾々の生活とどれだけの交渉があるのであらうかといふことである。

一木一草一石たりとも人間世界と交渉のないものはない、對照物として小さいか大きいかといふだけの區別である、まして人間社會に生を享けて吾々の先祖に大なるショックを與へた所謂事件やは、吾々の血汐と共に生きたり死んだりするものである、恰度、將門の存在がそれと同様の事件種である、殊に關八州の住民には生々しい事件種なの

である、そして、此の將門塚の存在から現代の生活にあらゆる物象の刺戟を與へ社會史的には興味ある研究材料となつて呉れるものである、冒頭はこれ位にしておいて本論に入らう、私は歴史家でないから確たる年代は知らない、また其麼ことは詮索しなくともよいことなのだ、將門が俵藤太秀郷に退治されたのは八百年位の昔の話なのだ、そして此の時の經緯を詳述したるものに將門記と稱する國寶になつてゐる著名なる書物がある、これの眞原本、著者名や年代まで記した所謂奥付きのあるものは名古屋の眞福寺といふ古刹に藏つてあるさうだ、現今將門記と稱して出版しある書物はこれの寫しであるさうな、其の書物が尤も正確で將門が夫程の悪人ではない、寧ろ非常な優秀なる人物であつた、換言すれば押の強い、而も策略家で、且つ情の深い男であつたことの眞相を誌してあるんださうだ、將門が滅亡してから百年程後世に著はしたものであるさうな、其頃に京都の公卿などが書き記した將門に關したる日記は澤山あるが、何れも霞を隔てて山を望む様な記事で眞相を掴ん

だものは前記の將門記の外にはないさうな。

此の將門記に依ると、關八州は悉く將門の勢力範圍で、大なる威力を有してゐたものらしい、然して平家の旺盛期といふ一劃をなしたものでらしい、無論、其の頃の政府の派遣されてゐた總取締とも言ふべき武藏守興世主といふ人などは征服されて了つてゐた、三浦千葉などの平家の氏族は、其の威壓の下に小さくなつてゐたものらしい、そしてその時の都たる武藏府中を文明の中心地として、且つ彼の政治的の舞臺として、利根川を挟みて東西南北に彼の強い力がガンガンと伸ばされてゐたものであるらしい、だから其の頃の關八州の住民は將門から異常なるショックを受けてゐたものらしい、夫だけ關八州の人達にとつては國定忠治以上に交渉の深いものがある。そしてその交渉が未だに續いてゐるかと思ふと寧ろ可笑しい位である。

附話休憩、將門が依藤太のために權花一朝の夢と化して、さしもの勢力も散々の敗北で、その結果は悲惨なる劇的光景のクライマックスに到達して御極りの討死をした、その

首を敵にとられて曝首にされては家來としては見るに忍びずといふので、家來共が苦心慘愴をして、其の頃の神田村

今の大藏省の地に首を埋めて、土饅頭を髓へたのである、昨日の征服者が今日は忽ち姿が變つて朝露の如き運命に逢着して土と御親類になつて、蟲の啼く聲に漸く慰められる身分となつたのだから、運命としては哀れなる最期であつた、然るに彼の征服者としての住民へのショックが大きかつたため、彼の追慕者が、耳から耳へと首の在り場所を便へ聞き竊かに手向けの花を供へた、それでも満足出來なくなつて、竟に將門塚を建立したのである、現今殘存してゐる古墳は形から推定すると確かに天慶年間（七百年前）のものであるらしい、坂谷男爵が曩に大藏大臣の時代、古墳のある地下を數尺堀り下けて種々の探索をしたが何物も發見されなかつた、何しろ火事のために徳川時代から十數度燒失してゐる場所だから、或は古墳の位置が變つてゐるのかも知れない、そして、大藏省が櫻田門外に新築されて、取拂ひになるときは内務省地理課の考證係りの柴田君の手

に依つて、もう一度仔細に調査するさうである。夫がために目印ともいふべき杭を打つてあるさうな。

兎に角、追慕者に依つて將門塚は建立されたが尙ほ我慢し切れず、日本人の癖として遂に將門を神様にしようではないかといふので相談一決、神田村の村名を取つて、吾々の守護神といふ意味から神田明神の名稱を附したのであるさうな。その神田明神は今の大藏省の中に、寛永年間まで嚴存してゐたのである。

勿論關東人の信仰の結晶物であつた、然るに、徳川氏が源氏の流れを汲み、關八州を征服して江戸に城を築いて、家來共の屋敷を造るときに、江戸城の附近に其歴平家の神社があつたのでは不都合だとあつて、今の駿河臺をトして神田明神を移轉させたのである。

神田明神を移したことの最大理由は、徳川には代々守護神として外にあつたからである、頼朝が八幡宮を崇拜し、藤原が春日神社を尊敬したと同様、徳川は日枝神社を崇拜してゐるからである。恰度江戸城として太田道灌の築いた

城廓の中に偶然徳川氏の信仰の標的となつてゐた日枝神社が守護神として鎮座しましたから、徳川氏が江戸城に移るや非常に縁起を擔ぎ早速平河町に移し、又今の山王臺に移し武家共をして日枝神社を強制的に信仰させ、悉く氏子にして丁つた、此の徳川の高等政策は天海僧正に依つて授けられたのである、さうなれば祕策の前には一方の神社は虐待を受けるのは當然である、まして、源氏と平氏の閥族争ひであるから一層慘めな目に會はされる、將門の行爲に種々と難癖をつけなければ修まらないのが人情である、また徳川家の祿を食むものもその難癖を誇張したことは火を暗るよりも明かだ、然し乍ら征伐されたる町人共の信仰の標的となつてゐる將門の神體を如何することも出来ない、若し何とかすれば恨を買つて行政上誠に由々敷大事を惹起するので、同じ神田村に屬してゐる區劃である駿河臺へ敬遠して丁つた、そして日枝神社が西奉行の支配下なれば、神田明神を東奉行の支配下として、御祭りも一年交替にして丁つた、神田明神の場所跡には武家の筆頭役である酒井

家の屋敷にして丁つた、夫でも町人共に遠慮してか或は町人共の信望を繼ぐためか知らないが、移轉した神社跡は江戸發祥地であるからといふので、昔の征服者たる將門塚をそつくり殘しておいた、町人は隨喜の涙を溢したことであらう、徳川といふ者は仲々行政上の手腕があつた、そして非常に人情味に富んだことをやつたものだ。

その神社境内地を頂戴に及んだ酒井氏は、徳川の筆頭に屬する武家であつた、酒井家では將門塚に對しては特に丁重なる扱をなした、その頃の神田明神の境内地は宏大なものであつたらしい、無論、今の神田川の外濠などはありつこはない、美土代町大手町附近一帯が悉く境内地であつたとのことである。

日枝神社が武家の信仰となつて山の手一帯を氏子に持つば、神田明神が下町全部の町人を氏子に持つて財閥的にその覇を唱へたものである、一年交替に御祭をやるときに、日枝神社がとかく經濟にめぐまれないのに反して、神田明神はふんだんに御金を費消して、頻りに町人の意氣を示し

武家に而當てをやつた。神田明神の御祭りといふとどれだけ江戸ツ子の血を湧かしたか知れない、最初の御輿を擔ぎ込まれる所は酒井家の中にある將門塚であつた。さぞかし酒井家でも嫌な氣持がしたことであらう、今も昔も官僚の心理は變らない、隅田川の水の流れは違つても……。

江戸ツ子の狂熱的の血汐が傳はつて、今でも神田明神といふと大變な騒ぎである。七五三の御祝日を見給へ、特權階級や商人連の可愛い生きた人形が高價なる衣裳をつけてが、スエ、ンジン、のついた車に乗つて、御供がついて明神様へ御參詣をする所は何のことはない呉服やの店飾の競争である、電車の兩側に數百臺の車が並列してゐるではないか、吾々の様な貧乏人はある一人の子供の衣裳だけの代價で一年位の生活費が捻出される、これは些か軌道外れの議論であるが、夫程に江戸ツ子と神田明神といふものとは離れることの出来ない血族的の關係にあつた。

如何に將門といふものは關八州の人達の血汐に涉潤して居たかが分る、關八州何れの國に行つても將門の史蹟は澤

山残つてゐる、將門神社といふものは到る處にある、但し代表的なものとしては前述の神田明神である、そして反對

のものとしては成田の不動さんである、此の不動尊は剛氣の佛様としては關東人の信仰淺からざるものである、夫が

どうして有名になつたか、やはり將門には大なる原因がある、將門が關八州に強大なる力を有してゐるときに、その將

門を討ち滅すために勅令を帶びて、京都から下つて來た倭藤太が人力にては覺束なしと思つてか、成田山に閉ぢ籠つ

て三七廿一日の間將門調伏の祈願をした、夫に依つてさしもの暴れ者の將門も倭藤太のために難なく平定されて了つ

た、夫から一躍して成田山は勅願所にもなり成田不動の名は關東人を風靡したとのことである、これも將門の御蔭で

ある、然るに奇怪なことは、その戰爭の際、將門が勝利を祈願した不動さんが、將門の敗北に依り敗け、不動の屈辱の名に依つて、少しも名聲が舉らないことである、何處に其

塵不動さんがあるか考古學者の外は知らない、傳聞する所に依れば成田不動の近傍にあるとの事である、同じ不動で

あり同じ人間に關係ありて、尙ほ斯く景氣不景氣があるかと思ふと苦笑に堪えない。

夫れ程に因縁の深い神田明神が、明治維新と同時に御神體の變更を來し、脇社に將門を祀り本殿には大國主の命を祭神となした、一方、徳川幕府の神様である日枝神社は、皇室の守護神であるといふので官幣大社として扱はれることになつた、そして神田明神が僅かに府社としての待遇を維持したに過ぎない、萬斛の涙なしでは居れない、明治維新といふものは民衆政治の美名の下に武斷政治の結晶見た様なものであつた、維新の大業の前には、町人は人間としての資格を感じて居なかつたものであらう、私は義憤を感じずには居れない。

府社になつても祭禮は東京人によつて華々しく行はれる、神輿は徳川時代と同様、大藏省内の將門塚の振出しであつた、そして古例に倣つて大藏大臣から金一封を出した震災後は打ち絶えた、將門も唯世の成り行きを憤慨したのであらう、現代人には迷信であつても種々と大藏省を中心

に不祥事が續いたとしたらば、形許りの祭禮をやることも満更のことはない、金のあり餘る程の片岡大臣であれば、將門の靈を慰むることも片岡さんの御繁昌を期する所以ではあるまいか、まして町人共の總取締であれば――。

大藏省は酒井家の屋敷跡だといふことは既述の通りだ、が此の酒井家といふも江戸ツ子の大家文藝とは深い交渉を有してゐた、江戸ツ子は昔から講釋師の張扇から叩き出される誇張した講談といふものを非常に喜んだものだが、其の講談物の有名なる一つが其處から生れて居る、奇しき因縁ではないか。今の人達でも講談と言へば大抵俠客物か、御家騒動物を讀破して居る、俠客物と言へば清水の次郎長、國定忠治、御家物と言へば仙臺萩である、其の仙臺萩の最期の審判が酒井家の屋敷で行はれた、主役である原田甲斐は酒井雅樂頭（當時の大老）を抱き込んで對手の忠臣たる伊達安藝の白髮首をとらんとして竊つたものだ、その最期の審判で事ならずと思つて原田が伊達に斬りつけて己も斬られて滅亡をしたといふドラマチックな大芝居を打つた

屋敷なのである。偽證罪にはならなかつたが揣摩臆測の風説は種々あつた、斯くも當時の檜舞臺に關係を有してゐるから將門塚が引き合ひに出されるのは無理はない、こんな譯で將門塚に大藏省、神田明神に江戸ツ子即ち東京人とも深い因縁が結ほれて居る。永らく金一封を出さなかつた用意の金で御祭りをすることも多少現代思潮の緩和策になるかも知れない、今は時めく政府の大官や、日本といふものの中樞機關を握つてゐる上流階級に屬する種類の人達が先祖の崇拜した神様や、また先祖を祀つた神社は官幣大社や中社、或は別格官幣社などに、若し一流といふ言葉が許されるならば此の一流神社、即ち別格官幣社以上官幣大社まで合して百八十九社の中の幾割かを占有して、子孫によつて御祭りが絶えない、例へば公卿華族としての鷹司、徳大寺、西園寺、近衛、一條、二條、三條、九條の各公爵の先祖神なる春日神社や、一門の守護神としての牧岡神社、香取、鹿島の兩神社などは官幣大社であり、藤原家としての中興の祖鎌足公を祭神としての談山神社は別格官幣社であり、

また大原野、吉田の兩神社は官幣中社である、勿論五攝家は皇室に關係由緒深い家柄であり、藤原姓は日本中興の文明の代表者であり功勞も尠からざるものがあり、其の流れを汲んでゐる前記の人達は現日本としても貴族の上の部に位する人達である、就中西園寺公の如き政界の大本山であつて、今の政界の無能力者は公の一言半句にも神經を失らして居る状態である、次にもう一つの貴族代表者としての徳川家（清和源氏）の守護神としての日枝神社、家康公を祀れる東照宮の如き官幣大社である、其の外に源氏としての守護である岩清水八幡宮は官幣大社であつた、鶴ヶ岡八幡宮は國幣中社である、今の世に源氏も平家も藤原もないが、然し之等の流を汲む貴族連には時代を超越しての榮枯盛衰に、絶えざる争闘とがある、そして現今日本を左右する貴族は源氏と藤原の兩派に屬する二大種族の旺盛なる時である、民衆政治家となりて自ら誇つて居る政治家共は此の貴族の前には叩頭百拜である、明治維新は何等階級の背景のない民衆に依つて一大革命をなされたとは言へ、二大

貴族の潛勢力は毫も衰へて居ない、此の時に當つて平家に屬する將門塚の首祭りをすることは何等かの意義はあるまいか、まして平家の流れを汲める種族の衰へて居るときに、將門神社と言へば大抵村社である、將門と言へば關八州の記憶を思ひ出すほど至る所に足跡を残してゐる、神田明神の復興を一日も早く計り堂々たる建築をして駿河臺から新東京を睥睨して貰ひたい。平家滅亡のとき獨り將門の記憶新しきは私の興味を惹く所以である。

◇ × ————— × ◇

◇ × ————— × ◇